



グループ名:
**キューバ囲碁
アカデミー**

創立:
1993年

代表者:
ラファエル・アルベルト
・トーレス・ミランダ

活動内容:
囲碁の普及と学習

ラファエル・アルベルト・トーレス・ミランダさんへのインタビュー

囲碁を知っていますか？日本では、2人のプレイヤーが交互に黒と白の石を盤上に置き、どの範囲を囲むことができるかを競う、ボードゲームのことを指します。いろいろとルールはありますが、黒と白がお互いに陣地を奪い合い、最後に陣地が大きい方が勝ち、というゲームです。その歴史は古代中国に遡り、日本でも古くから定着し、第二次世界大戦後にはテレビで囲碁番組が始まるほど子供を含め多くの市民に親しまれています。

キューバでは、ラファエル・アルベルト・トーレス・ミランダ氏が囲碁連盟会長として、囲碁の普及に努めています。ラファエルさんの囲碁との出会いは、一筋縄ではいきませんでした。1991年当時、ラファエルさんは、日野自動車のキューバ駐在員であった佐藤悠一さんの事務所の机に置いてあった白黒の碁石と網目模様の台に興味を持ちましたが、当時囲碁はキューバでは知られておらず、なかなか囲碁との接点をつかむことができませんでした。それでもラファエルさんは諦めず、佐藤さんに囲碁を教えてもらえるよう何度も説得、交渉しました。ある日ラファエルさんが自ら釣った新鮮な魚を佐藤さんにプレゼントすると、佐藤さんはラファエルさんを自宅に招待し、そこで囲碁を教えてもらうことができたのです！「エビで鯛が釣れた」とラファエルさんは当時のきっかけについて語ります。今年5月、キューバを訪れた佐藤さんは、「私でも勝てるように、囲碁の初心者を探してくれと、ラファエルに頼まなければなりませんよ」と、ここまで囲碁を広めたラファエルさんの活躍に目を細めます。

囲碁との出会いから普及へ

「囲碁のキューバへの普及は難しくなかった」とラファエルさんは言います。1993年にはキューバ囲碁連盟が設立され、最初の全国大会が開催されました。ラファエルさんいわく、キューバ人は日本文化が大好きで、囲碁は、チェスのプレイヤー、武道家、漫画好きの人、等、さまざまな分野で日本に興味を持っている人を魅了するものだそうです。その言葉を証明するように、現在キューバの囲碁連盟と囲碁アカデミーには1829名の選手が登録されています。驚くことに選手の活躍は、キューバの東部グアンタナモから西部のピナル・デ・リオまで広がっています。どのように各県や市は囲碁に取り組んでいるのでしょうか。



教育省やスポーツ・体育・レクリエーション庁（INDER）が、各自治体に囲碁の先生論を配置し、囲碁の輪を広げる助けをしているのです。というのも、チェス同様、キューバでは囲碁は頭脳スポーツとして認識されるようになったのです。すべての自治体が力を入れて囲碁の練習をしている、とは残念ながら言えませんが、首都ハバナに続く第2の都市、サンティアゴ・デ・クーバを始め、さまざまな地方都市で、囲碁に対する熱意を感じることができます。



2019年藤村大使（当時）の囲碁アカデミー訪問

活動内容

現在囲碁連盟及び囲碁アカデミーが活動している建物は、2008年に日本政府の草の根文化無償資金協力によって建てられたもので、スポーツ施設「エドゥアルド・サボリ」内にあります。新型コロナの影響もありましたが、今ではこれまでと同じような活動ができるようになってきました。たとえば今年の2月と4月に大会を実施、8月には第26回サマーカップを開催予定です。5月23日からは、新しい先生を迎えて学校カリキュラムの体育授業の一環としての囲碁コースが再開されました。また、月曜から金曜の17時から20時までは一般公開コースが開かれています。

5月のある日の午後、1週間前に囲碁を始めたばかりのエステルさんは、アカデミーに着くとすぐに、意気揚々と囲碁台の前に座りました。エステルさんは、囲碁は歴史がある芸術で難しそうに思えたけれど、そこに興味を持ち、囲碁を始めたそうです。「囲碁で学ぶことは、人生の様々な部分に応用することができます。そして難しいよりも楽しいと気づきました。」彼女の笑顔からもそれが伝わってきます。

“

「囲碁の対戦は感情に満ちており、すべての瞬間を楽しむことができます。一つ一つの対戦が、まったく新しい体験で、対戦相手であっても、常にお互いから学ぶことができ、相手と経験を共有、新たな関係を築いていくことができます」



キューバの囲碁の強さ、そしてこれから

キューバの囲碁チームはメキシコ、グアテマラ、アメリカ、ブラジルの国際大会に参加したことがあり、2004年以降ほぼ毎年、日本棋院が派遣する日本のプロ棋士と交流しています。新型コロナの影響から交流がストップしていますが、前回2017年に開催された際は、20名の日本の先生方が訪問されました。壁に貼られた幕には、笑顔の写真が並べられており、囲碁による交流が友好を深めることを物語っています。また、キューバは毎年日本棋院が開催しているパンダネットというインターネットで行われる囲碁大会に参加していますが、キャプテンと選手8人からなるキューバのチームは、ラテンアメリカリーグのグループBで無敗、1位なんです！キューバのインターネット状況が改善し、接続の不具合で不戦敗となってしまうことがほぼなくなった今、来年にはグループAで優勝し、日本で行われる世界大会へのチケットを手に入れる意気込みです。

「囲碁は文化、教育、スポーツ、政治をまたぐ超越性を持っている」。ラファエルさんはキューバ国营ニュース、新聞、雑誌などの主要メディアから受けた20以上のインタビューをとおり、囲碁の普及に貢献してきました。「囲碁の対戦は感情に満ちており、すべての瞬間を楽しむことができます。一つ一つの対戦が、まったく新しい体験で、対戦相手であっても、常にお互いから学ぶことができ、相手と経験を共有、新たな関係を築いていくことができるのです」とラファエルさんは囲碁の面白さを語ります。彼の言葉を聞いていると、囲碁の魅力は無限に感じられます。また、14歳の時に柔道の県大会で57kg級の優勝者にもなったほど、日本の武道に愛着のあるラファエルさんは、武道やスポーツの鍛錬は、囲碁をより理解する手助けになると考えています。「実際に柔道を実践し、魅力を知っていたからこそ、囲碁にもその感覚を感じることができたのだと思う。」とかつての自分を振り返ります。

囲碁アカデミーの事務所の鍵付き棚の中には、1993年から現在までのキューバ囲碁連盟及びアカデミーのすべての情報が詰まった分厚いファイルが並んでいます。その30年の歴史は、日付と写真入りできれいに整理されており、長年にわたるラファエルさんの囲碁とアカデミーを支えてきた生徒たちへの愛情が伺えます。そこには、写真や日付だけでは知ることのできない、彼しか知らない秘密がたくさん詰まっていることでしょう。ラファエルさんはすでに「囲碁と私」という本を執筆済みで、近々出版される予定です。この本の中で、知られざるキューバの囲碁の歴史の秘密が解き明かされるのではないのでしょうか。

